
甘くて苦い

基地外

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甘くて苦い

【著者名】

Z5336B

【
基地外

【あらすじ】

バレンタインの、ある男の子と女の子の想い。初々しい、若々しい感じが伝わってくれれば嬉しいです。

Boys side

バレンタインにチョコでコクハクというのは、日本だけにしかない習慣らしい。つまり、実はホントにおかしメーカーの陰謀なわけだ。

でも、そんな事を言つてみた所で氣休めにもならない。運命の2月14日に女の子のキモチが分かつちゃうのは、変えようの無い事実なのだ。

だから、バレンタインはいつも、僕にはただの嫌がらせでしかなかつた。

。 - +
。 + . 。 +
。 '

「おはよう」

「おはよっ」

そんな挨拶がなされる、朝の校門。

いつもはただの社交辞令のような声も、今日は少し違っていた。
今日は、2月14日。恋する乙女が大きな勇気を出す日だ。
意味もなくざわつく校舎。妙に距離をおく男性陣と女性陣。
そんな浮ついた空氣の中を、僕は足早に教室へ向かう。

逃げたかった、といつのこと、ひょっとしたら少しの期待もあったのかもしれない。

色褪せたドアをガラツと開けば、教室にはまだほとんど人はいなかつた。

そんな中…窓際から2列目の一いちばん前。

柔らかそうな栗色の髪の女の子が、ドアの音に気付いて僕の方を振り返つた。

なるべく平静を裝つて、僕は窓際の自分の席に向かつ。

「おはよう、シユウくん」

可愛らしい声が、僕を呼ぶ。

「お…おはよう、マユちゃん」

僕も慌てて伏せていた顔を上げて返事をする。

栗色のセミロングに、優しげな瞳。柔らかく微笑み、小さな両手は背中に回されて、見えない。

僕の…大好きな人。

「今日は、みんな教室に来るのが遅いね

「う、うん…玄関辺りに沢山いたね」

「……」

僕もマコちゃんも、それきり押し黙つてしまつた。
気まずい沈黙が、降りてくれる。

不意に、俯いていたマコちゃんが顔を上げた。

「あ、あのっ…シコウくん…」

「な、何?」

どき、どき、どき。

心臓が、苦しい。

マコちゃんの一拳手一投足が、気になつて仕様がない。

あるいは瞳が、不安げに僕を見上げてくれる。

桃色の唇が、少し震えてくる。

柔らかな頬が、まつかになる。栗の髪が、ふわふわと揺れる。

きゅっと目を瞑り、顔を逸らして……再び僕を見上げ、マコちゃんは口を開いた。

「……う、国語…わからない所があるんだけど、教えてくれる…？」

「あ……うん、いいよ。どーしょ。」

微笑んでみせ、僕は彼女の席に向かいつ。

。 * 。
' * 。

別にバレンタインだからといって、授業などが特別になるわけでもない。当たり前の事だ。
教壇に立つ教師の講義をボンヤリと聞きながら、僕はななめ前のマコちゃんの髪を見つめていた。

2年前の事だった。

あの時もボーッと授業を聞いていた僕は、となりからうるさい転がってきた消しゴムに気が付いた。
『はい』
すぐ拾つて、となりの席の人へ渡した。
『あ…ありがとう』
その人は微笑み、お礼を言つてきた。

汚れのない…驚くほど素直な笑顔を、僕は生まれて初めて見た。

マコちゃんのあの微笑みを、僕は生涯忘れないだろう。

気が付けば、教師が黒板に何か書き始めていた。あわててペンを持つ。

だけど金属性のペンは僕の手を滑りぬけ…カラソと床に落ちてしまつた。

慌てて拾つて戻るとき…一瞬だけ、マコちゃんとの目が合つた気がした。

。 × ।
。 ।

気が付いたら下校時刻だった。

さあざまなコートに身を包んだ人たちが、思い思いの方向に帰るのを窓から見ていた。

ふと振り替えれば、教室には誰もいなかつた。

誰も…マコちゃんも。

何故…いつも期待してしまつのだろ？。

成績優秀で気立てのいい美少女のマコちゃんが、僕なんかに興味を持つわけないのに。

ちよつと考えれば…すぐ分かることなのに。

はじめから、分かっているはずなのに……。

「……………」

気付けば僕は泣いていた。

机に突っ伏して、しきしく泣いていた。

情けない。
男なのに。もう十九歳じゃないのに。

なんで……なんでこんなに苦しきんだね。

なんで……こんなに胸が痛いんだね。
なんで……涙が止まらないんだね。

なんでこんなに……寂しきんだね。

僕は貴女が、大好きです。

Girly-side

昔から料理は得意なほうだった。特に菓子作りはすくなく楽しいと思う。

だから、チョコレートトリュフとかショコラチーズケーキとか、作るのはとても簡単なんだ。

でも…作ると渡すのとは、訳が違う。

,

+

.

-

+

.

+

.

いつもよりカバンを大切に持つて、朝もやに霞む校門を通る。
今年こそは…今年こそは。

昨日からずっと…いや、心の片隅ではもっと長い間思っていたこ

今日は、2月14日。甘い願いを男の子に贈る日だ。

いつもは誰もいない朝の校舎も、今朝は田覚めが早い。
そんな中…私はいそいで教室に向かつ。

どうか…彼がまだ来ていませんように…。

まだ薄暗い教室のドアをカラッと開けば、夜のあいだに冷やされた空気が体を撫でてゆく。

蛍光灯を点けても、教室には誰もいない。
誰も…シユウくんも。

窓際の列の、前から3番目。

朝の日が、そこを眩しく照らしていた。

私は窓際から田を逸らし、教壇近くの自分の席につく。
そして…そのまま固まる。

静かな教室に、心臓の鼓動だけがうるさかった。

(早く…早くしなきや…)

体が言ひじとを聞いてくれない。ふるえが止まらない。

(こやがなきや…シユウくんが…)

どりにかこうにか右手だけをガタガタ動かし、カバンの中から小さな包みを取り出した。

つよいピンクの、紙の包み。

いつのまにか、教室には2、3人が登校していた。

まつたく気付かなかつた。
もつと急げばよかつた。

(どりこむへ…)

やるべき事は何か？簡単な事だ。少し後ろの机まで歩いて、ブツを入れて、そしらぬ顔で戻ればいい。

よし、やるべ。
席から立ち上がった瞬間…ガラッヒドアが開く音がした。
シユウくんだった。

あわてて両手を背中に隠した。

「お…おはよう、シユウくん」
それはもう必死に平静を装つた。

「おはよう、マコちゃん」

静かな低音が、私に答える。

濡れ羽色の癖つ毛に、真っ白な肌。一瞬上げた切れ長の瞳は、前髪に隠れてよく見えない。

私の…大好きな人。

「き…今日は、みんな教室に来るのが遅いね」

「うん、玄関辺りに沢山いたね」

「……」

私もショウくんも、それきり押し黙ってしまった。

わ…渡さなきや…。

意を決して、ショウくんの顔を見上げた。

「あ、あのっ…ショウくん…」

「な、何？」

どき、どき、どき。

心臓が、苦しい。

全身が熱くて、顔から火が出そう。

真剣な瞳が、緊張の色で私を見つめてくる。

血色の良くない唇が、少し震えている。

真っ白な頬が、リンゴ色に染まる。黒い髪が、ふるふると揺れる。

顔を逸らして…息を止めて……そしてショウくんを見上げ、私は口を開いた。

「…………」、国語…わからない所があるんだけど、教えてくれる…？」

「あ……うん、いいよ。どう?」
シユウくんは微笑んで、私の席に向かつた。

。 * - 。 * 。

バレンタインなんて行事が、学校に関係あるわけない。時間はいつも通りに進んでゆく。

黒板の前に立つ教師の講義をボンヤリと聞きながら、私はシユウくんの事を考えていた。

2年前の事だった。

あの時もボーッと授業を受けていた私は、一つかりして消しゴムを落としてしまった。

『はい』

となりの席の人気が拾つて、渡してくれた。

『あ…ありがとう』

その人は微笑み、席に戻つた。

偽りのない…驚くほど優しい笑顔を、私は生まれて初めて見た。

ショウくんのあの微笑みは、私の一生の思い出だ。

気が付けば、教師がチョークを手にとっていた。あわててペンを持つ。

ノートに字を書こうとしたとき…後ろからカラソンと音がした。

ふと後ろを振り向くと…一瞬だけ、ショウくんと田中が合った気がした。

。 - X .
' . X .

気が付いたら下校時刻だった。

色とりどりのノートに身を包んで校庭を帰る人たちが、階段の窓から見えた。

ふと振り替えれば、階段を通る人もまばらになっていた。

私は…なんて力ない女なのだろう。

毎年毎年…シユウくんに作ったチョコは、いつも私のお腹の中に入っていく。

何のために作ったんだろう。

慣れた手でチョコレートを混ぜ、一つのトリュフを作った。それが昨日。

それがどうだ。

1日立てば意氣込みは吹っ飛び、まともに話すことができない。

ふりれるのが怖い。

嫌われるのが怖い。

成績優秀でまわりに優しい眉田秀麗のシユウくんが、私なんかに興味を持つてくれるわけがない。

「……………ぐす

気付けば涙が出てきていた。

階段の踊り場に、ポタッと水滴がこぼれた。

情けない。
自分が腑甲斐ない。

……でも、そう思つて泣いていたら、何だかスッキリしてきた。
あるいは、開き直つてしまつたのかもしれない。
それならそれでいい。

教室には、わざわざショウくんがいた。

私は今から教室に戻るつ。
ショウくんにチョコを渡して、赤いままでの田で告白しそう。/
そして、サッパリとふられよう。

でも、それでも構わない。

胸につかえるモヤモヤした気持ちを吐き出し、スッキリとしてしまおう。

それが、今の私がすべき事だ。

私は貴男が、大好きです。

Girly-side (後書き)

まだまだ出来の悪い話ですが… 読んでくださいてありますーー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5336b/>

甘くて苦い

2010年10月15日22時52分発行